



年間第 5 主日 (マルコ 1:29-39)

生活のどの場所にも、イエスを迎えることができる

説教を準備した時点では、本日の「年間第 5 主日」で主日の公式ミサ中止は終了となっている予定ですが、実際はどうなっているのでしょうか。期待を込めて、今週で公式ミサの中止は終わるという前提で話してみたいと思います。

今週与えられた朗読箇所は、「イエスのカファルナウムでの一日」と言えるような活動です。その中に「会堂」での活動があり、「家」での活動があり、「戸口」での活動があります。この三つは次のことを意味しているでしょう。「会堂」は人間の宗教生活の場であり、「家」は個人的な生活の場であり、「戸口」は公の生活の場を代表しています。ですから、「イエスのカファルナウムでの一日」は、人間生活のすべての場から人間を苦しめる悪の力を追い出した一日だと言えるでしょう。

イエスは、人を悪から救うためにこの世に遣わされたのですから、この一日はイエスの生涯全体を凝縮した一日となりました。イエスを招き入れた場所では、それぞれの場所で神の救いの働きが実現していきます。これは私たちに、一つのことを教えているのです。それは「私たちも、神の救いの働きにあずかるために、それぞれの場所でイエスをお迎えすべきだ」ということです。

福音朗読で紹介された場所は三つです。「宗教生活の場」「個人的な生活の場」「公の生活の場」でした。このどれもが、イエスをお迎えすると、神の救いのわざが実現する場となり得るのです。具体的に考えると、今週まで公式ミサが中止になっていましたので、「宗教生活の場」はどこにあるかと言うと、家庭祭壇のある場所です。家庭祭壇はあるけれども祈りはない。そういう生活から立ち帰って、家庭祭壇の前で祈る時間を取り戻します。すると神の救いの働きがここから始まります。

同じように、個人的な生活の場にも、イエスをお迎えしましょう。個人的な生活は誰にも左右されたくないと考えるでしょう。もちろんイエスをお迎えしても、個人的な生活を左右されることはないのです。もし、個人的な生活に、イエスが入ってきて欲しくないと考えていたら、そのような過ごし方とは決別しましょう。神の救いのわざが実を結ぶ個人的な時間のほうが、そうでない時間よりも当然重要です。

最後は、公の生活の場にイエスを迎えることです。職場に、摩擦を生じない形で、自分の信仰を織り交ぜてすばらしい結果を出した人を紹介しましょう。かつて日本ハムの監督を務めた外国人に「トレイ・ヒルマン」という人がいました。彼の口癖を覚えている人もいるでしょう。「シンジラレナ〜イ！」彼は熱心なプロテスタント信者でした。「信じる」というたった一つの言葉を野球の職場に取り入れて、神のわざが公の場で実を結ぶよう、率先して働いたのです。

私たちも、生活のすべての場でイエスを迎え、すべての場所に神の救いのわざが実を結ぶお手伝いをしましょう。私たちが手伝う時、イエスはいつも私たちの手を使って大きな働きをしてくださいます。